

吉屋信子における女の義理人情

広岡守穂

- 1 ひとりの男を愛したふたりの女が結ばれる世界
- 2 通俗小説がえがく恋愛
- 3 女の友情
- 4 家父長制の描き方
- 5 女の義理人情

1 ひとりの男を愛したふたりの女が結ばれる世界

吉屋信子（一八九六～一九七三）は一九三〇年代から一九六〇年代にかけて女性に絶大な人気を誇った作家である。一九一六年から一九二四年まで『少女画報』に八年間も連載された『花物語』は、一〇〇年近くたったいまでも多くの読者をもっている。吉屋信子ほど、少女があこがれるロマンチックな世界を美しくつくりあげた作家はいないといっ
ていいだろう。

『花物語』は、一九一六年から二四年まで『少女画報』に断続的に連載され、その後『少女倶楽部』にも発表された。竹久夢二や高島華宵の絵、中山晋平のメロディ、宝塚少女歌劇などとともに、大正ロマンがつくりだす「少女」の世界にぴったりとおさまる小品集である。ストーリーをみると、少女が母親のもとから別れて、同世代の少女たちとの友情関係に入っていく姿がくり返し描かれている。大正ロマンという竹久夢二の詞と絵で爆発的にヒットした「宵待草」が真つ先に思い浮かぶが、「宵待草」が大流行したのが一九一七年であった。

しかし吉屋信子がつくりあげた世界は『花物語』の延長にひろがっているのではない。ロマンチックな夢想とはかけ離れた、のっぴきならないアクチュアリティを帯びた世界である。夢想には二種類ある、といえればわかりやすいだろうか。ひとつは、花畑だとか、楽園だとか、実人生とは無縁の夢想である。人は自分がおかれたなまなましい現実を遮断して、いつとき楽しい夢想にふけることができる。『花物語』が提供するのはそういうファンタジーの世界である。だが夢想にはもうひとつの夢想がある。それは現実生活をゆがめたところにつくられる、いわばパラレルワールドのような夢想である。大嫌いな人間がいなくなったらと想像したり、自分に振り向いてもくれない人が自分に夢中になっている夢をみたりという、そういう種類の夢想である。こちらの夢想はかならずしも寝覚めのいい夢のような夢想ではない。目覚めている間に嫉妬や苦悶や悲しみがいつも自分をとらえて離さないときに、つかの間それを裏返してみせてくれるような夢想である。たとえば、家父長制社会で、男が妻のほかに愛人を持つたとき。当然、妻も愛人も嫉妬に苦しみ男の不実を怒り悶えるだろう。そういうとき、ひとりの男を共有する縁によって、女同士がかたく結ばれるといった種類の夢想が、吉屋信子の世界がつむぐ夢想なのである。

吉屋信子を流行作家の地位に押し上げたのは、一九三六年一〇月六日から翌年四月一五日にかけて『東京日日新聞』

と『大阪毎日新聞』に連載された『良人の貞操』である。この小説は女の貞操ばかりやかましくいわれた当時において、男の貞操を取り上げたことで大きな話題になった。

ヒロインの水上邦子は貞淑な人妻である。良人の信也との間に子どもはいない。女学校の同級生だった加代が信也の従兄弟の磯田民郎と結婚して女の子を産んだ。ところが子どもが生まれてじきに民郎は死んでしまう。やむなく加代は邦子を頼って娘を連れて上京してきた。

邦子と加代は対照的な性格だが、たいへん気があう。邦子は幸うすい加代のために、なにくれとなく世話を焼いている。ところが、やがて加代はこともあろうに良人と深い仲になってしまう。しかも夫の子を身ごもってしまうのである。夫は妻を裏切った。しかもその相手は妻の無二の親友なのである。親友と夫のふたりから裏切られた邦子は嫉妬と憎しみに焼かれてはげしく苦しむ。

ストーリーはテンポ良くすすんでいくし、人物もうまく書き分けられている。しかし、ここから先に展開していく世界はけつしてわかりやすくはない。一筋縄ではいかないのである。

加代は夫の子どもを妊娠した。邦子は悶え苦しむが、どうしてか夫をも加代をも憎みきれない。加代はいちずな女性で、自分の感情に忠実なところがある。とても魅力的な美しい女性であり、しかも若い未亡人なので、誘惑もさぶる多いのだが、加代は愛する人でなければけつして性的な関係にならない女性である。美貌の加代は幾多の男から言い寄られるが、会社専務の後妻の話も、富豪の妾にといい話もきっぱり拒絶してきた。そのことは邦子もよく知っている。実をいうと亡くなった夫との間にも加代は円満な愛情があったわけではない。加代は美貌でありながら、これまで心から男を愛したことがないのである。そういう加代が、自分の夫とのつびきならぬ関係になった。それは

加代にとって生まれてはじめての命がけの恋愛だったのだ。たしかに夫の行為は言語道断である。しかしその夫も、ふだん女遊びにうつつをぬかしたり、妻をないがしろにしたりしている男ではない。並の男にくらべたら、はるかに行儀もよく誠実な男である。つまり貞節な男なのである。そういう男が一途な女と恋に落ちたのだ。

苦しんだあげく邦子は決断する。邦子がたどりついた結論はこうだ。加代と夫は別れさせる。今後、自分たち夫婦は加代との交際を絶つ。問題は加代が産む子どもをどうするかだが、子どもは自分たち夫婦の子どもとして育てる。それが邦子の結論だった。「生まれた子どもは母親の子でもあるが父親の子でもある」という理屈で、加代の子どもを育てようと考えたわけである。

結論を得た邦子は驚くべき行動に出る。邦子は加代の出産につきそうのである。その場面は、『良人の貞操』という物語のクライマックスである。それどころか、吉屋信子が書いたすべての小説のクライマックスだといってもいいかもしれない。邦子はまるで自分が出産するかのようになり、加代とともに苦しむ。邦子は陣痛に苦しむ加代の手を握り「加代さん、私付いてます。大丈夫よ、大丈夫よ」と励ましながら、涙が出そうになる。「産婦の受ける苦しみも痛みも、それが同時に邦子の肉体にも精神にも伝わり、邦子は今自分自身が生みの苦しみを、如実に味わう気がした⁽¹⁾」。邦子は生まれてくる子が夫の子であることを実感していて、そのために加代の産みの痛みに自分の体が共振してしまっている。

これはまた、なんとという世界だろうか。

吉屋信子がつくる世界は単純なハッピーエンドでは終わらない。吉屋信子の最初の新聞小説である『地の果てまで』(一九二〇年一月から六月まで「大阪朝日新聞」に連載)もけっしてハッピーエンドではないが、次の『海の極みまで』

(一九二二年七月から二月まで『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に連載)は、凄惨な結末の悲劇である。吉屋信子はそういう悲劇の書き手として文壇に登場した。初期にみられた激しさはじよに影をひそめていくが、吉屋信子の小説は、社会の理不尽に身をちぢめている女たちが、女のきずなをたしかめあつて、そこにしあわせを見出すというふうな終わり方のものが少なくない。

夫の愛人の出産につきそつて、妻が愛人といつしよに苦しむなどということが、いったいありうるのだろうか、と読者は疑うだろう。わたしも疑うが、邦子はたしかに加代との深い深い結びつきを確認しているのだ。その結びつきとは、一人の男を共有する女同士のきずなであり、夫との結びつきより、もっと強いきずななのである。そして女同士の連帯がもたらすのは、男との結びつきがもたらしてくれる悦楽よりも、ずっとずっと深い悦楽なのである。しかもそれほど強いきずなをたしかめていながら、邦子はもう加代とは会わないと決心しているのである。

邦子は、生まれてくる子は水上の家を継ぐべき子どもだという理屈で自分を納得させている。この時点で、邦子は「腹は借り物」という家父長制の思想を受け容れている。それにしても、これはいかにもいかにも、しっくりしない理屈である。しっくりしない、というのは、なんらかの諦めを要求されるのではないか、という意味である。女のきずなを確認するのに、わざわざ封建道徳による必要などあるのだろうか。

だが、この問いを考えるのもう少し後にしよう。その前に、吉屋信子の世界では、未婚男女の一途な愛は、結ばれるにせよ結ばれないにせよ、ひとまずは肯定されるのだということを確認しておこう。一昔前の家庭小説のように男女の自由恋愛が頭から否定されるわけではない。加代と信也のような、妻の親友と夫という組み合わせでさえ、いちばんの当事者である妻が、苦しみながらふたりの純愛を容認するというかたちで、受容されるのである。

こういう展開は吉屋信子の最初の新聞小説である『地の果てまで』にはやくも姿をあらわしている。『地の果てまで』は、大阪朝日新聞創立四〇周年記念事業としておこなわれた懸賞小説に当選した作品で、このとき信子は二三歳だった。

『地の果てまで』は、春藤直子、緑、麟一の三人のきょうだいの物語である。三人の父は外交官であったが、はやくに父母を亡くしたあと、叔父に育てられた。三人は性格が違う。直子は柔和な性格であるが、緑は勝ち気で麟一を是が非でも父とおなじような外交官にしたいと思っている。しかし麟一は内気で音楽を愛する青年である。物語は麟一の進学を軸に、考え方や生き方の異なるさまざまの登場人物がからんですすんでいく。

春藤きょうだいの母は園川家に奉公していた。その縁を頼って麟一は園川家の書生にしてもらう。その園川家の息子の良高と妻の千代子は伊豆で農業をしている。良高の妹の関子は一度結婚したが離縁して戻って来ている。

興味深いのは関子と千代子の関係である。外向的な関子にくらべて千代子は内向的と、ふたりは対照的な性格なのだが、関子が麟一を片想いしたことをきっかけに女同士の友情で強く結ばれる。千代子は「私は人妻でございます。生涯人を愛することの叶わぬ身です、してはならない禁制の身でございます。けれども、貴女は、最初の不幸な結婚にお破れになりました。今度こそ、御自分で摘んだ御自分で選んだ真の人の愛の実をお胸に立派に結んで下さいまし」と言って関子をはげます。生涯人を愛することの叶わぬ身とは不思議な言い方だが、実は麟一はひそかに千代子を恋していて、千代子はうすうすそれに感づいているのである。そういうわけだから関子も麟一をつかまえることはできない。結局、関子は恋をあきらめ良高夫妻といっしょにくらす。ここにみえるのは、吉屋信子がくり返し取り上げたテーマ、つまり一人の男をめぐるふたりの女が友情で結ばれるというテーマである。関子は麟一を片想いし、

麟一は千代子を片想いする。そしてこのような純粋な愛情は肯定される。しかし最後に強いきずなでむすばれるのは、関子と麟一でも麟一と千代子でもなく、なんと関子と千代子なのである。

2 通俗小説がえがく恋愛

通俗小説が未婚男女の恋愛を肯定的に描くようになったのは、一九二〇年代のことであった。それ以前の、一八九〇年代から第一次世界大戦前までは家庭小説といわれ、家庭小説では未婚男女の恋愛は軽はずみな過ちだった。菊池幽芳の『己が罪』（一八九九年～一九〇〇年「大阪毎日新聞」）や小杉天外の『魔風恋風』（一九〇三年「読売新聞」）では独身時代に恋愛したばかりに、ヒロインたちは孤立し、さんざん罪の意識に苦しんだり、病死したりしたのである。そればかりではない。そもそも妻はひたすら夫につくすべき存在であった。柳川春葉の『生さぬ仲』（一九一二年「大阪毎日新聞」）「東京日日新聞」）に登場するヒロインの夫は無能な事業経営者であるし、渡辺霞亭の『渦巻』（一九一三年「大阪朝日新聞」）の夫は愛人のいうなりになって妻を追い出そうとする非道な夫である。それなのにヒロインは夫につくす。文句ひとつ言わず夫の言いつけに従うのである。夫がどんな人間であろうが、妻たるものは夫に仕えなければならぬ。男たちが「君、君たらずとも、臣、臣たらざるべからず」（主君が主君らしいおこないをしなくても、臣下はひたすら主君に仕えるべきである）という忠義道徳に従うことを要求されたとすれば、これはその女性版である。

それが第一次世界大戦後になるとがらりとかわる。それを変えたのが菊池寛の『真珠夫人』であった。『真珠夫人』は一九二〇年六月から一二月まで『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』に連載された。主人公の唐澤瑠璃子は華族の娘

で、成金の富豪に陥られた父を救うため、その富豪の妻になるが、夫に身を許すことなく仇敵である夫に復讐をとげる物語である。物語の前半で夫は死ぬが、主人公は身勝手な男に対する復讐心にとらわれている。物語の中で、瑠璃子が女性差別について語る場面はなかなか読み応えがある。男の身勝手が許されるなら、自分はおなじことをしてただけだ。なぜ男の身勝手が許されて、女ははげしく非難されなければならないのか、と瑠璃子は叫ぶ。「男性は女性を弄んでよいもの、女性は男性を弄んでは悪いもの、そんな間違つた男性本位の道徳に、妾（わたくし）は一身を賭しても、反抗したいと思つていきます。今の世の中では、国家までが、国家の法律までが、社会のいろいろな組織までが、そうした間違つた考え方を、助けているのでございますもの」⁽³⁾。そういう復讐心を心底にひめて、瑠璃子は美貌を武器に男たちを虜にし、思うままに翻弄する。そして二人の若者を死に追いやる。だが、物語の最後で瑠璃子自身も、手玉にとつた若者の凶刃にかかつて命を落とすのである。

『真珠夫人』のヒロインは夫に従うどころか、夫に復讐しようとした。これはもちろん当時の道徳が認めるところではない。だから彼女は最後に死ななければならぬのであるが、愛されるにふさわしい人格をもつていなければ、たとえ法律上は夫であっても愛される資格はないという思想は、『真珠夫人』を原点として、たちまち通俗小説のあいだに広がっていった。中村武羅夫、加藤武雄、三上於菟吉、竹田敏彦、川口松太郎といった人気流行作家たちは、そろって未婚男女の恋愛を肯定する立場にたつて書いていた。

三上於菟吉は一九三一年に書かれた『楽園の犠牲』で、ヒロインの菊岡京子に、愛がないのに結婚するのは夫に貞操を売ることだとまで語らせている。「貞操はあづけられるものでもなければ、人の為を守るものではないのです。わたしならわたし自身のために守るものです。だから、ほんとの事をいへば、わたしは貞操を破つた女なので

す。良人といふ名の男に貞操を売つたのです。わたしといふものは、賤しい、賤しい、いやしい……。京子は自分を賤しんでそうつぶやく⁽⁴⁾。

中村武羅夫は一九二二年に『講談倶楽部』に連載した『夜の潮』が大ヒットし、それ以来、各誌から注文が殺到した。『地霊』は一九二七年から一九二九年まで『婦女界』に連載された。中村武羅夫が追求したのも愛情の尊さで、富豪令嬢の不幸な結婚生活をつうじて、愛なき結婚生活が女性に忍従を強いることをえがきだしている。二九年から翌年にかけて『婦人倶楽部』に連載された『嘆きの都』でも、貧富の格差や都市と地方の格差を背景に純粹な愛への希求がえがかれている。主人公は華族の庶子で、田舎に預けられて育つた娘が、東京の父親のもとに引き取られて、さまざまな苦難に会うという物語である。親から見合い結婚を迫られるが、思う人がいるヒロインは首を縦にふらない。そして、とうとう家出してしまふ。

加藤武雄の最初の通俗小説は一九二二年から翌年にかけて『婦人之友』に連載された『久遠の像』であったが、その後、続くすべての作が独身時代の愛情を肯定的にとらえている。『呼子鳥』は一九三六年一月から三七年二月まで『キング』に連載された。『呼子鳥』では、独身時代に愛し合ったふたりは故あって結ばれないが、いつまでもその愛をあたためつづける。たとえ結婚しなくても、たとえ性的関係がなくても、愛は尊い人格の結合として永続するのである。もう恋愛は、一時の気の迷いでも、軽はずみな過ちでもない。

竹田敏彦はいわゆる実録小説から出発したため、あまり重視されないが、通俗小説の書き手としては一流だった。竹田敏彦が扱う愛情も性的なものをこえたふくらみをもっている。一九三六年から三七年にかけて雑誌『主婦之友』に連載された『子は誰のもの』のテーマは母の愛であるが、未婚男女の恋愛を毛嫌にする年上の世代と、そのために

つらい悲しみをしいられる若い世代の葛藤が物語の背景をなしている。『呼子鳥』では男女の恋愛はころざしを共有する男女の友愛と地続きのものとしてとらえられているが、『子は誰のもの』では、男女の愛情は親の子に対する愛情と同じ性質のきよらかなものとしてとらえられている。男女の恋愛はより大きな広がりをもつ「愛」のなかに、その中心をしめるものとして位置づけられているのである。

川口松太郎の『愛染かつら』（一九三七年～一九三八年『婦人倶楽部』）は、身分違いの未婚男女が、さまざまの苦難に会いながらも愛を貫くという物語である。物語の最後に恋人に求婚されたヒロインは、とてもうれしい、わたしもあなたを愛している、だけど結婚するのはしばらく待つてほしいという。自分が職業人（歌手）として立派に独り立ちするまで待つてほしいというのである。川口松太郎のヒロインは、愛する男性と経済的社会的に対等な立場にたとうとする女性である。

一九二〇年代に家庭小説ということばが使われなくなり、通俗小説ということばがとってかわったのは、このように未婚男女が恋愛することに對する考えかたが大きく変化したからであった。

3 女の友情

『女の友情』は吉屋信子が生涯かけて追求したテーマを、ずばりタイトルにもつてきた小説である。一九三三年一月から三四年二月まで『婦人倶楽部』に連載され、小林秀雄が「二ページ読めばわかる」と、酷評したことが語りぐさになっている。酷評というより罵倒というべきか、いま読んでみても、小林の文章は悪意に満ちている。小林

が「二ページ読めばわかる」といった最初の二ページは、ふたりの若い女性の、いわばガールズトークの場面である。会話ははずんでいるし、ふたりのいきづかいが伝わってくる。それを酷評するのだから、小林の偏見と嫉妬のほどが伝わってくる。批評界の実力者がジェンダーの偏見にみちた目で有能な若手女性をこきおろすところは、これより四〇年ほど前に、森鷗外が中島湘煙を執拗におとしめたのとそっくりの構図である⁽⁵⁾。

小林がかちんときたのは、綾乃と豊造の初夜の場面だった。がさつな豊造が自分はお前の夫だ、入り婿だからといって遠慮はしない、夫として自由にふるまうからそのつもりで俺に仕えろ、と横柄な態度で言い渡すあたりの描写に、小林は「子供に読ませる本に必ずしも作者は人生の真相を描いてみせる必要はない。だがあんまり本当のことは遠慮する」といい「何とかといふ令嬢が番頭と無理な結婚をさせられて、初夜を明かす温泉宿の描写などは殆ど挑発的だ」といって、嫌悪感むきだしにかみついている。『婦人倶楽部』の読者である女性を「子供」とさげすみ、豊造の下劣な男性性の描写を「本当のこと」と表現するのだから、小林はあきらかに、男性が女性作家の手によって貶められたと感じたのである。ここには、頭角をあらわしてきた有能な女性作家に対する嫉妬と通俗小説に対する蔑視、つまりは女性に対する蔑視と通俗小説に対する蔑視の二重の蔑視がある。底意がすけてみえる文章である⁽⁶⁾。

男の物腰や言いぐさを、新婚初夜からその後にかけての場面で、吉屋信子はじつくりと書き込んでいる。これが、世の中のふつうの男というものに対する吉屋信子の印象だったのであろうし、小林秀雄も男というものをおなじようにとらえていて、それが当たり前だと思っていたところへ、その醜悪な部分をあまりにもあざやかに書かれたので、思わず向かつ腹をたてたというのがこの真相だったのだろう。

さて、物語の中心は、綾乃、初枝、由紀子の三人で、三人は府立女学校の同級生である。綾乃と初枝は商家の娘で

ある。そして綾乃と由紀子は教育熱心な親のもとで育てられた箱入り娘である。綾乃は本郷の書店の一人娘で、女学校卒業の翌日、父親がきめた男と結婚をする。家付き娘が婿取りをするわけである。ところがその相手の豊造は、「このごろの女学生に処女は少ないそうだから心配だ」などと、面と向かって綾乃にいうような、いかにも無神経で無教養な男であった。

由紀子の母親は亡くなっている。父親は建設会社を営む金持ちであるが、由紀子とはあまりうまくいっていない。父には愛妾があり、由紀子の実母が他界したあとに、その女性が後妻にはいつている。母親が父親との結婚を悔やんで亡くなったこともあって、由紀子は生涯結婚しないつもりである。そうして学校を卒業したあと、東北地方のM市にあるマリア館というカトリックのセツルメントでブリュンヌさんという年取ったフランス人女性の秘書になる。

さて綾乃は豊造が不始末をしかしたおかげで離婚する。周囲の人たちは同情するが、綾乃は解放されホッとしている。やがて綾乃は店番をしているときに、庄司慎之介という美青年と思ひ合う仲になる。ふたりは逢瀬をかさねるようになったが、慎之介は仕事で慌ただしく台湾に旅立った。折悪しく綾乃は妊娠したことを知る。しかしだれにも相談することができず、ひとり思い悩む。慎之介に手紙を出すのだが、慎之介からはいつこうに便りがこない。父親は誰か、親身になって心配してくれている初枝や由紀子に打ち明ければいいものを、綾乃は口をつぐんでいる。なにしろ慎之介にさえ、仕事の邪魔になつてはいけなないと、身ごもつたことを打ち明けないのである。

初枝はおっとりした綾乃とは対照的な性格である。あとで綾乃が子どもを産んだとき、それでも口を割らぬことを知って「まあ、なんてだらしくその人に惚れ込んだんでしょう、綾乃さんともあろうものが……憎らしい、日本のオール女性の恥辱だわ」と憤慨する。

相思相愛の綾乃と慎之介であるが、大事などころで何度もすれ違いをかさねる。台湾に渡った慎之介は思わぬ長期出張を命じられ、おながが大きくなった綾乃は由紀子のいる修道院に身を寄せる。そのために慎之介と綾乃は音信が通わなくなる。身重の綾乃は時々刻々と出産が迫ってきているから日に日に憂慮が深くなっていくし、慎之介は慎之介で綾乃に裏切られたのではないかと疑念を生じる。やがて慎之介は帰国するが、その才能に由紀子の父親はすっかり惚れ込んでしまう。由紀子もまた綾乃の思い人とはつゆ知らず、慎之介に好意を抱くのであった。ふたりは婚約にいたるが、やがて綾乃のことばかりから慎之介は綾乃が愛した男であったことがわかり、由紀子は懊悩する。ひとりの男をふたりの女が愛するという、吉屋信子お好みのパターンである。

いよいよ、ここからの筋の展開に、吉屋信子の本領が発揮される。職場の同僚から、回送されなかつた綾乃の手紙を受け取った慎之介はM市へ奔って綾乃と再会する。そしてすべての誤解が氷解してふたりは愛を誓う。ところが、その場で綾乃は心臓発作を起こして死んでしまう。そして慎之介とともに綾乃を看取った由紀子はトラピスト修道院にはいる。由紀子にとってみれば、慎之介は綾乃という大切な人がいながら、やすやすとほかの女に心をうごかした男なのである。「結婚」と「恋愛」と、然して「男性」への烈しい絶望感に襲われた処女は、もはや人の世にある限りは、女性としてこの三つの恐しきものの避け難きを知りて、この上は一生を純潔で神の花嫁としてのみ、生涯を献げ得る修道院の生活を希い願うのも道理だった」と吉屋信子は書いている。三人の仲良しのうち、ひとりはお産直後に他界し、ひとりはお産院へ去ってしまった。あんなに仲が良かった三人は離ればなれになってしまうのである。

こうして『女の友情』もやはりハッピーエンドでは終わらない。吉屋信子はハッピーエンドで終わらない女の物語で一躍文壇の寵児になったのであった。『海の極みまで』など初期の作品には破綻がみえるが、物語の結構が安定す

るようになるのは『女の友情』からだといつていいだろう。

ところで、ハッピーエンドで終わらない物語で一世を風靡したといえ、なんといつてもいの一に思ひ浮かぶのは長谷川伸だろう。一八八四年生まれの長谷川伸は吉屋信子より一二歳年上だが、一九二〇年代後半から「沓掛時次郎」などの股旅ものの戯曲を次々と書きはじめて評判になった。吉屋信子と長谷川伸はともに日本人のこころの琴線にふれる忍従と自己犠牲をえがいた。長谷川伸の股旅ものは、「瞼の母」にしても「一本刀土俵入」にしても「関の弥太っぺ」にしても、物語の最後には一件落着したとみえて、主人公の男はどこへともなく去って行くのである。愛し合う男女は結ばれず、親子はつかの間の再会をはたすだけで、男も女も、親も子も、最後の最後には涙にくれるのである。ハッピーエンドでは終わらない。そういう作家として、女の吉屋信子と男の長谷川伸は対をなしているのである。このことについてはこの後すぐ、節をあらためて述べたい。

4 家父長制の描き方

ふつうの恋愛小説ならば物語は一途な愛が実を結ぶところで終わる。しかし吉屋信子の小説はそこからもう一幕も二幕もある。男女は夫婦になっても、円満に結ばれつづけることはない。そこにはかならず家父長制の都合とか男のエゴというものが割り込んできて、ふたりの平穏な結合を邪魔する。

『良人の貞操』が大好評のうちに終了した一〇か月後、一九三八年二月二二日に、おなじく『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』に『家庭日記』の連載がはじまった。連載は七月一九日までつづいた。

ヒロインの生方品子は和歌山の医者で、夫の修三は医者である。修三は医学博士になるために品子の親の援助を受けて勉学中である。夫婦の家にはお手伝いさんがいる。修三の仲の良い友人に辻一郎がいる。一郎には妻がある。実は一郎は気の弱いところがあって、子どもができたので仕方なく結婚したのである。一郎の妻の卯女は貧しい家庭の育ちであるからか、一郎の父親は頑として一郎の結婚を認めようとしない。孫の鐘吉は籍に入れても卯女は頑として嫁と認めない。一歩たりともわが家の敷居をまたがせない構えである。言い忘れたが、一郎の父親も医者である。

中学高校からの親友であるが、修三と一郎の性格は対照的である。「二年の時に肋膜炎で学校をやめてブラブラして、写真技術なんか凝っていたが、あげくの果てに莫迦な自由結婚みたいな事をして、家をしくじり、大連へ行つて満鉄の情報課とかで写真技師をやっていたんだそうだ⁹⁾」というのが、修三の一郎評である。「莫迦な自由結婚みたいな事」ということばが、修三の結婚観をあらわしている。

夫同士が親友なので品子は一郎夫妻と親しく行き来しているが、そうこうするうちに品子は一郎のことを憎からず思うようになった。たしかに夫の言うように一郎は判断力が足りないかもしれない。しかし一郎は、やさしく、異性の意思をたいせつにするところがあるのだ。一郎の人間性に対する品子の評価は夫とはまったく違う。

卯女は思うことをすぐ口にする女である。家の中のかたづけも得意ではないし、がさつなところがあるが、品子はそんな卯女をうらやましく思うことがある。品子は専業主婦である自分の生活に物足りないものを感じているからだ。世の中のにぎやかなうごきをよそに「こうして小さい屋根の下に、うずくまっているうちに、自分ひとりおいてばかりにされて、地球は一廻りも二廻りも、するよな、さびしい感じだった¹⁰⁾」。おおかたの奥様はこんな一生を送るのかと思うと、卯女のように「闊達自在に、呼吸してゆくのも、一つの生き方だ¹⁰⁾」と思っている。

結局卯女はひとり息子の鐘吉を一郎の父親に取られてしまう。鐘吉は辻家の孫だが、卯女は辻家の嫁ではないという理屈だった。大事な子どもを取り上げられ、卯女はだまされたと思い、一郎はもちろん、まわりの人たちも信じられなくなって出奔する。そして杳としてゆくえがわからなくなってしまふ。しばらくたってから、しらせがあつて喉頭結核で入院していることがわかる。やがて卯女はひっそりと息をひきとる。卯女が死んで、一郎は深い悲しみに沈む。そして品子は「女を一人うらぎつて、それでいまぬくぬくと仕合わせな、家庭生活にひたつていられる人には、何の天罰もくだらず——かえつて、純情を守りぬいた辻さんに、家庭生活の破滅が来たなんて——なんという不公平な世の中だろう——」⁽¹¹⁾と思う。夫の修三は独身のころ関係をもつた女を弊履のごとく捨てた過去があり、そのことを品子は思い出しているのだ。

『良人の貞操』ほど劇的なかたちではないが、邦子が加代との強いきずなを感じているように、品子も卯女とのきずなを感じている。そしてもう卯女と会うことは永遠にできないのである。

さて、ここでひとつ考えておきたいことがある。不思議なのは、男性社会のきびしい批判者であるはずの吉屋信子が、家父長制だとか封建思想だとかを、いちがいに退けるようにもみえないことである。『家庭日記』では、産んだ子を夫の実家に取り上げられても、母親の卯女は別離の悲しみに耐えるばかりであり反撃しようとはしないし、しかも著者の筆の運びは、この点に関するかぎり、かならずしも卯女に同情しているようではない。母子のつながりは明治の家庭小説以来、通俗小説の一大テーマで、母を慕う子の思いの強さや、子を思う母の愛の強さが、くり返しくり返し描かれた。母ものは通俗小説の最重要ジャンルだったが、吉屋信子の小説には母性に焦点が当たった小説はない。子は誰のものか。母ものを得意とした竹田敏彦の小説では、誰が子を、子が誰をいちばん愛しているかがかなめなのだ

が、吉屋信子の小説では、子の帰属は子がどの家のものかによって決められる。「良人の貞操」でも『家庭日記』でも、子どもは夫の、というより夫の家に属するのである。

一九四〇年に発表された『鳶』の場合は、もっと不可思議である。主人公の糸子は高級官僚であつた原が女中に産ませた子である。一度は結婚したが夫の不身持ちのため離別している。糸子には腹違いの姉がいるが、姉とはうまくいっていない。糸子は姉夫婦の家に同居しているが、義兄に関係を迫られたために出奔する。口封じに与えられた手切れ金を元手に糸子は天ぷら屋を始める。手ごろな物件をみつけ、伊能弘吉という実直そうな若い職人を雇つて店をはじめめる。

糸子はもう人のいいなりになるのはたくさんだと思つている。なにか商売をして生きていきたい。「私、小さい時から日蔭もののやうに、育つて、原の家で小さくなつて、自分を殺して、人のいひつけ通り、お嫁に行つて、またいひつけ通り戻つて来たし——もう、人のいひなりになるのたくさんよ——私、これから、独立主義で暮らすの！」⁽¹²⁾

店の二階でくらすことに決めた糸子はいふ。「私、ここに暮らせると思ふと、嬉しくつて——ねえ、だから、やつぱり、女は独立しなくちや駄目ね、親の家に依存したり、良人に依存したり、男に縋りつきたかつたりしてゐるうちは、そんな、もの欲しさうなの、みんな駄目よ、やつぱり、女も人間一人として独立してやるつて、気概さへあれば、どうにかなるんですもの」⁽¹³⁾。

店が順調に動きはじめたころ、別れた夫が糸子の前にあらわれ迫る。彼は復縁を迫つて店であれば騒ぎになるが伊能が撃退してくれる。この事件はふたりを急速に近づけ、やがて糸子は伊能と結婚の約束をする。ところが結婚を間近に控えたある日、前夫は軍隊に召集される。そしてそのとたんに糸子の心中では変化が起こる。糸子は、あれほど

恐れ嫌っていた前夫に面会に行く。そして前夫に、離婚はしていても、一生独り身で生きていく、子どもはちゃんと育てていくと誓いをたてるのである。糸子は伊能に結婚できなくなったと告げる。やがて前夫は戦死する。そしてわずかの関係者だけで前夫の葬儀を執り行っている場所へ、いまは京都大学の学生になった伊能がやってくるというところで物語は終わる。愛する人ができて、一度は結婚しようと思った糸子は、結局、独身主義に戻ったのだった。

『蕙』には女の友情という要素はない。それなのに、男女の愛情より「家」が優先されるのである。出征した前夫が戦死すると、いまは前夫とは別に愛する人がいるのに、わざわざ彼と別れて、前夫の面影を偲びながら夫の親に仕えようとするのである。ここにあるのは、生き方のマゾヒズムと名づけたくなるような、故意に幸せを拒絶して、堪え忍ぶことによるこびをうたおうとする不自然な姿勢である。『蕙』の背景には戦争があるから、ヒロインは国家のために前夫の「家」に仕えようとするわけで、そういうかたちで一応の理屈はたっているのだが、そのかわりここには、現実生活をゆがめたところにつくられる夢想など存在しない。あるのは男が国家のために犠牲になるのなら、女は家のために自己をささげるのだという、しあわせ断ちの覚悟である。なにしろ『蕙』は興亜日本社が戦意高揚を目的として出版した『女流作家十佳選』に収録された中編小説なのである。一九三七年に日中戦争が勃発しており、吉屋信子は国策に従って、銃後の女の覚悟を迫っているわけである。

自分に対して愛の喜びを禁じて、他界した前夫の家につくす。これは自己犠牲である。マゾヒズムならよろこびがあるだろうが、自己犠牲によるこびはあるまい。

5 女の義理人情

吉屋信子は女の義理人情を提示してみせたのだとはいえまいか。長谷川伸が股旅もので描いた男の義理人情に対応するような、女の義理人情である。吉屋信子は長谷川伸の女性版、女長谷川伸ではなかるうか。そして吉屋信子の人氣はそこにあつたのではなかるうか。

『鳶』は女性読者に、しあわせを禁じよと呼びかける。男たちが兵隊になつて戦地で生死の境をさまよつているときに、銃後にいる女も安閑としてはいられない。銃後の女はしあわせになつてはいけない。というわけである。だが『鳶』の主題はわかりやすいだけであつて、吉屋伸子が語ろうとした本当の女の義理人情ではない。

愛する男と添わないのが女の義理人情ではない。いくら世間では立派な男として通用していても、自分を裏切つた男といつしよにくらすのは、義理人情ではなく、たんなるがまんである。『良人の貞操』の水上邦子も『家庭日記』の生方品子も、外見は夫に庇護されて平穩にくらす貞淑な妻である。しかし邦子も品子も夫を愛しているかといえは、それは相当にあやしい。邦子と品子が愛しているのは生活の安定であつて、夫は愛しがいがあるタイプの男ではない。本当をいうと、邦子も品子も、女の友情をはげみとして家庭生活に耐えているのである。家庭生活は平穩だが、どこか息苦しさが覆つている。でなければ諦めが覆つている。本当なら、夫なんかいないほうがいい。だが、夫との關係を断つということは、社会秩序に背くということだ。平穩なくらしを捨てることでもある。『鳶』の糸子には自立してくらすだけの經濟力があるが、邦子にも品子にもその力はないのである。そこで、女の友情をこころに

抱きながら、現実の生活に甘んじるといふわけである。もつとはつきりいえば、本当は女の友情に従って生きていきたいのに、がまんしている。これは長谷川伸の主人公たちがみな一様に自分自身にしあわせを禁じると同様のこころ模様なのではないだろうか。

十分納得のいくような説明になっていないかもしれない。佐藤忠男の長谷川伸論のたすけを借りながら、このあたりのことを説明してみよう。

佐藤忠男の『長谷川伸論 義理人情とは何か』（中央公論社、一九七五年）は出色の長谷川伸論であり義理人情論である。佐藤忠男は長谷川伸の股旅ものについて、やくざの義理人情を賛美したのではない、主人公は義理人情の世界から抜けだそうとしてもがいているのだ、と述べる。

「ただ、長谷川伸の股旅ものを、単純に、やくざの世界の封建的な義理人情を礼賛するもの、というふうに理解する人が多いが、それは違って、と言わなければならない。長谷川伸は、やくざの封建的な義理人情を礼賛したことはなかった。彼はむしろ、封建的な親分子分関係から逃げよう逃げようと努力するやくざをえがきつづけたと言っている⁽¹⁴⁾」。

自分のようなものはしあわせになつてはいけない。だからたとえ思い人があつても添い遂げようとしてはならない。こころの中で女の友情を抱いて生きるしかない。そう覚悟するのが女の義理人情である。ではなぜしあわせになつてはいけないのかといえは、夫がいるから、好きになつていけない人を好きになつてしまったから、自分が同性愛者だからなど、理由はいろいろである。

佐藤忠男は、長谷川伸がえがいたのは義理人情から逃げよう逃げようとする底辺の男だったと述べたのにつづいて、

重要な考察をめぐらせている。そういう底辺の男が、たとえば凶状持ちであつてさすらいの旅に生きるしかないといった事情をかかえる男が、縁あつて女性を愛するようになり、愛する女性のために命がけでつくすそうとする。ところが自分はいつまでも女性といつしよにはいけない。ここらならずも凶状持ちになつてさすらいの人生を送っている男に、どうして女性をしあわせにすることができらうか。だから男は命をかけて女を守つても、たたかいが終わつた後は女のもとから去つていく。長谷川伸の股旅ものはそういう構造を持つているのだと佐藤忠男はいう。

重要なのはその先の指摘である。佐藤忠男は、女のために命を賭けてたたかうヒーローなど、それまでの日本の大衆文化にはいなかったというのである。「そういう男が、自分つまらない人間だし、あなたを幸福にする自信もない、と言いながら、にもかかわらず命をかけてその女のために戦う。そういうヒーローを日本の大衆文化は股旅ものによつてはじめて持ち得たわけなのである。侍は主君のためには命を賭けるが原則として妻子や恋人のためには刀を抜かないし、町人はそもそも抜く刀を持たない。したがつて、そもそも日本の大衆文化の中では、妻子のため、恋人のために男が奮闘するというロマンが成り立ちにくく、その点、やくざというものはなほだ重宝な存在だということが発見されたわけである」⁽¹⁵⁾。

佐藤忠男は、「侍は主君のためには命を賭けるが原則として妻子や恋人のためには刀を抜かない」という。時代小説に登場するヒーローは、たしかに主君のためなら妻子を顧みないのである。それが忠義ということであつた。妻もそのことを覚悟していて、夫に殉じることが武家の妻たるものの心得になつていた。腕がたち、主君のために身命を投げ捨てる侍と、夫につくし、いざというときは夫に殉じる覚悟をしている妻と、それが日本人に推奨される男女の組み合わせだつた。

こういう組み合わせは現代物の通俗小説にもしばしば再現されていて、佐藤紅緑の『虎公』などはその一例である。ただし『虎公』の主人公は女ではなく男である。『虎公』は一九一五年一〇月から翌年三月まで『読売新聞』に連載された。主人公の虎吉は氣風のいい快男児だ。働き者で義理堅い。正直者で、一身の利害は眼中にない。身を殺して仁をなすタイプの正義漢である。虎吉は魚屋を営んでいるが、ゆくゆくは貧しい人たちのために無料宿泊所をつくりたいと思ひ、こつこつと蓄えをしている。その虎吉にこれでもかこれでもかと試練がふりかかる。そしてふりかかる試練を虎吉はいつも明るくのりこえていくのである。

虎吉には秀子という好いた女性がいる。秀子は以前、悪党の長次の妻だった。いま虎吉といっしょに育てている娘のお徳も、長次とのあいだにできた子である。虎吉は、お互い惚れ合っているのだから、ゆくゆくは秀子と結婚したいと考えているが、すぐに結婚しなくてもいい。まずは無料宿泊所を建てるために、いっしょにがんばろうと考えている。ところが死んだはずの長次は生きていた。長次が目の前に現れたとたん、虎吉は、秀子は長次のものだといいだす。長次がとんでもない悪党で、秀子が心底嫌い、秀子が愛しているのは自分だということを知っていながら、虎吉は秀子が長次のものだというのである。秀子の気持ちなどおかまひなしである。

ついでにいえば、佐藤紅緑は「愛はすべて」という考えを嘲弄する。『虎公』に登場する遠山明という青年は、西洋風な教養をもち、法律政治も文学も音楽も、なんでも器用にこなす才能の持ち主だ。しかし明には真心というものがない。彼はロマンチックな恋愛論を雄弁に語りながら、さてこの女をどうしてもものにしてやろうかと舌なめずりしているようなタイプの男である。紅緑はこういう人物を登場させることで、自由恋愛がけつして本物の愛ではないこと、いやむしろ墮落した欲望の口実に使われるものだということを、示唆しているのである。

恋愛を口実にできるのは西洋的な教育をうけたものたちだ。彼らは教育はあっても、道徳はない。虎吉は一介の庶民だが、彼らにくらべたら虎吉のほうがどれほど立派かわからない、というわけだ。その立派なはずの虎吉は、秀子の気持ちなどおかまいなしに、封建的な三従の教えを女の道として肯定している。秀子はじめ『虎吉』に登場する善玉の女性たちはみな女の道に従っている。

一九三七年になってもそういう日本人の好みは生きていることを小島政二郎の『人妻椿』が立証した。『人妻椿』は一九三五年から三七年にかけて『主婦之友』に連載され、読者を熱狂させた。連載が終わらないうちに松竹で映画化されるほど、熱烈に支持されたのである。『人妻椿』は、自分を取り立ててくれた社長の身代わりになって罪をかぶる辣腕のビジネスマン矢野昭と、その貞淑な美貌の妻嘉子との組み合わせになっている。時代物と違って『人妻椿』の主人公は妻のほうである。ふりかかると災難に苦しめられながら、どんなに追い詰められても貞操を守りぬくという筋立てである。『人妻椿』に登場する夫も、「妻のために刀を抜かない」タイプの夫である。

もちろん登場人物は善玉と悪玉にはつきりわかれていて、このうえなくわかりやすい。そういうところをふくめて、一九一〇年代に書かれた『生さぬ仲』や『渦巻』とおなじである。『人妻椿』は三〇年代の通俗小説としては古いタイプの物語である。しかし大きな違いがある。『生さぬ仲』や『渦巻』では、夫が相当にひどい男だったが、ヒロインは妻だというだけの理由でひたすら夫につくした。そういう夫たちと違い、昭はひじょうに有能なビジネスマンである。ここが大きな違いである。昭は孤児であったが、実業家に拾われて育った。無私のこころを持ち、主家に対する忠誠心が強く、自己犠牲を厭わない。昭は誤って人を殺したあるじの身代わりになって外国に逃げる。

留守を守る妻・嘉子には恐ろしい危険がこれでもかこれでもかとおそいかかる。レイプされそうになったり、監禁

されたり、さらに嘉子には数々の誘惑の手が伸びてくる。が、どんなに窮乏しても、くらしのために操を捨てるなどということは考えもしない。すれちがいやら誤解やらでヒロインはどんどん追い詰められていき、ついには精神に異常を来すほどひどいめにあう。しかし最後には救いの手が伸びてきて大団円を迎える。

有能で、無私のころを持つ男と、貞淑で、他者に対して害意を持たない女。この組み合わせは、戦前の日本人が大好きな組み合わせだった。

さて、思わぬ寄り道をしてしまったが、吉屋信子の小説に主人公の夫として登場するのはどういう男かという点、多くは有能でしっかりしたタイプの男である。邦子の夫の信也は学生時代の恩師にさそわれて本の執筆に参加するほどの力をもっているし、品子の夫の修三は医者である。そのうえふたりとも妻を尊重する気持ちを持っている。けっして暴君ではないのである。しかしそれでも、ふたりとも妻との間にかたいきずなを築こうとするタイプかといえれば、そうでもない。自分の主義や趣味はけっしてくずそうとしないのである。つまりは「妻子のためには刀を抜かない」タイプの男なのである。一方ヒロインである妻は、従順に夫に尽くすだけではない。夫の身勝手な黙って受け容れているようにみえて、決してそうではない。女の友情か、または自立できる経済力があれば、いつでも自由としあわせを享受できることがわかっている。

吉屋信子の小説ではほとんどの場合、女は外形では男に尽くし秩序に従うのであるが、内実はそれとはうらはらに、男を介し男を通り越して、女たちが手を結びあう。本当のしあわせは男によって与えられるものではないのだということ吉屋信子は示す。自分は無力な人間だし、自分ひとりの力でしあわせをつかみとるのは難しいかもしれないが、自分には同性の親友がいて、おたがいにささえあい導きあうことができる。そういう女のコミュニティを、女たちは

つくることができるのだということを、吉屋信子は暗黙のうちにほめかしているのである。『鳶』では、男を紹介して女たちが手を結びあうという図式は崩壊している。しかしそのかわりに自立して生きる力が守られている。『鳶』の糸子は邦子や品子のように、主婦として夫の稼ぎに依存してくらしている女ではないのである。

とはいえ、吉屋信子が読者に突きつける結論はこうだ。自分のために刀を抜いてくれない男との間に、かたいきすなどつくれるはずがない。男女関係は主従関係とは違う。だがホモソーシャルな社会では、立派な男ほど主従関係の中に生きていく。しかも愛情関係にいるときより、主従関係の中にいる方がいきいきとしている。つまりは、立派な男にかぎって、自分のために刀を抜いてはくれないのだ。そうであれば、女が本当にいきいきと生きるためには、同性の親友が必要だ。おたがいにささえあい導きあう、そういう女のコミュニティが必要なのだ、と。

一戦後、一九五一年から五二年にかけて、『毎日新聞』に『安宅家の人々』が連載された。この作品に、吉屋信子は知的障がいをもつ安宅宗一という男性を登場させた。宗一はうそいつわりのない美しいこころの持ち主であるが、そのかわり女のために刀を抜ける男ではない。この作品にも宗一の妻の国子と義妹の雅子というふたりの女性があらわれるが、この作品では、ふたりとも宗一にこころ惹かれるのである。知的障がい者というかたちで、理想の男性像がしめされたわけである。宗一の死後、ふたりの女性が思いを語り合う場面は、吉屋文学のもう一つのクライマックスである。

(1) 『吉屋信子全集・第5巻』朝日新聞社、一九七五年、二二二ページ。以下『全集』と表記。

(2) 『全集・第2巻』一五八ページ。

(3) 『菊池寛全集・第5巻』高松市菊池寛記念館、一九九四年、二二三ページ。

- (4) 『長編三人全集・第15巻』新潮社、一九三二年、二八四～二八五ページ。
- (5) 小林秀雄の文章は『小林秀雄全集・第四巻』新潮社、二〇〇一年、二五九～二六〇ページ。また森鷗外の主宰する『めさまし草』が湘烟の「一沈一浮」を酷評した文章は、『鷗外全集・第二四巻』二三八～三三九ページ。関口すみ子『良妻賢母主義から外れた人びと 湘煙・らいてう・漱石』みすず書房、二〇一四年を参照。
- (6) 駒尺喜美『吉屋信子 隠れフェミニスト』を参照。
- (7) 『全集・第3巻』二二二ページ。
- (8) 『全集・第3巻』三〇二ページ。
- (9) 『全集・第5巻』二七四ページ。
- (10) 『全集・第5巻』三三二ページ。
- (11) 同右、四三八ページ。
- (12) 吉屋信子編『女流作家十佳選（戦時下の女性文学4）』二〇〇二年、ゆまに書房、二二六ページ。
- (13) 同右、二四〇ページ。
- (14) 佐藤忠男『長谷川伸論 義理人情とは何か』中央公論社、一九七五年、一〇七ページ。
- (15) 同右、一六二ページ。

(本学法学部教授)